

日本語の空の機能範疇*

前 田 ひとみ

1 はじめに

言語を意味の伝達的手段としてとらえた場合、意味を伝えるのに重要な役割を果たすのは、動詞や名詞、形容詞などといった語彙範疇である。しかし、生成文法のように人間の持つ普遍的な能力として言語を分析する場合には、機能範疇と呼ばれる文法関係を表す範疇が重要な役割を果たす。特に最近は、言語間の差異を機能範疇によって説明しようという研究 (Fukui(1995)、Fukui and Takano(1998)、酒井 (2000)、Fukui and Sakai(2003)、青柳 (2006) など) が活発に行われている。

これらの研究の中で、日本語の多くの機能範疇は音形を持っていることが指摘されている。C[+Q(uestion)] の /ka/、C[-Q] の /to/、T[-past] の /ru/、T[+past] の /ta/ などがその例である。さらに、Fukui and Takano(1998) は、日本語の *v* は自動詞と他動詞の対比において何らかの音形を持っている (開く → 開ける、閉まる → 閉めるなど) と述べている。これに対して、英語の機能範疇は空である場合が多く、それが V-raising などの現象を引き起こしているとされている。つまり、機能範疇が空であるか否かが、日本語と英語の違いの大きな部分を担っているということである。

このような研究がある一方で、日本語にも空の機能範疇を仮定したほうが上手く説明できる場合もある。例えば、「か」がない疑問文における空の C、連結詞「だ」の [-past] の T などである。¹

本論文では、以下のような文の構造とその派生を示し、容認の可能性の差を説明したい。名詞文の疑問文において、(1) のように [-past] と [+past] で容認

の差が出る。²

- (1) a. *家賃が 6万円だか？
b. 家賃が 6万円だったか？

この差は、真偽疑問文だけでなく、疑問詞疑問文でも現れる。

- (2) a. *家賃が いくらだか？
b. 家賃が いくらだったか？

ところが、疑問標識の「か」を取ると、(1)a. は相変わらず容認不可能であるが、(2)a. は容認可能になる。(上山(1990)、Yoshida and Yoshida(1996))

- (3) a. *家賃が 6万円だ？
b. 家賃が いくらだ？

(1)a.、(2)a. が容認不可能なのは、「だ」+「か」の連続がよくないのかと言うと、そういうわけでもない。埋め込み文になると、「だ」+「か」の連続が許されるのである。

- (4) a. *家賃が いくらだか？ (= (2)a.)
b. 花子が [家賃が いくらだか] 知っている。

これらの例を、空の機能範疇と音形のある機能範疇の違いを観察することによって説明したい。すなわち、[±ph(onetic)]の形式素性を認め、これが顕在的統語部門及び形態部門の派生に影響を与えることを示したい。³

論文の構成は、次の節で、上山(1990)とYoshida and Yoshida(1996)の「か」のない疑問文についての分析を概観し、 $[_C+Q/-ph]$ と $[_T-past/-ph]$ を日本語の文法の中に設定したほうがよいことを示す。⁴ 第III節では、(1)-(4)の非対称性を説明するのに必要な理論的背景(Fukui and Takano(1998)、Fukui and Sakai (2003)、青柳(2006))を簡単に紹介する。第IV節で、それらを使って、問題の文の構造と派生を示す。第V節では本論文で扱いきれなかったその他の構文に触れる。最後はまとめである。

II 空の C[+Q] と空の T[-past]

1. 「か」がない疑問文

上山(1990)とYoshida and Yoshida(1996)は「か」がない疑問文に着目して、連結詞の「だ」の特異性を指摘した。扱ったデータは次のようなものである。⁵

- (5) a. *家賃が6万円だ?
 b. ?*家賃が6万円です?⁶
 c. 明日、大学に 行く?
 d. 明日、大学に 行きます?

一般動詞の文は常に「か」の省略が許される。連結詞を使った文では、「か」の省略が許されない場合((5)a.b.)がある。しかし、連結詞を使った文でも、時制が $[_+past]$ であるか、疑問詞が含まれる場合は、「か」の省略が可能である。

- (6) a. 家賃が 6万円だった?
 b. 家賃が 6万円でした?
 c. 家賃が いくらだ?
 d. 家賃が いくらです?

これらを説明するために、上山(1990)は(7)のような一般化を提案している。⁷

- (7) ある CP が [+wh] (本論文では [+Q]) と解釈されるためには、
- (i) CP の指定部または主要部が [+wh] の要素で満たされているか、
 - (ii) C に [±past] をにう要素が位置していなければならない。

(6)c.d. が疑問文であると解釈されるのは、「いくら」という疑問詞があり、その [+wh] 素性が CP の指定部に移動して、(7)(i) を満たすからである。(5)a.b.c.d.(6)a.b. は、(7)(i) を満たしていない。しかし、(5)c.d.(6)a.b. には [±past] をにう要素 I (本論文の用語では T にあたる) があり、これが C に移動するので、(7)(ii) を満たす。上山(1990)は「だ」「です」には時制がないとしているので、(5)a.b. は (7)(ii) も満たすことができない。従って、(5)a.b. は非文となるのである。

これらのデータの中に (6)c のように「か」の有無によって、容認の可能性が変わってくるものがある。従って、「か」がない疑問文は、単に疑問文の「か」を省略しただけではないことがわかる。

- (8) a. *家賃が いくらだか? (= (2)a.)
 b. 家賃が いくらだ? (= (3)b. (6)c.)

日本語の「か」が [_C+Q/+ph] であるとする、「か」のない疑問文は [_C+Q /-ph] を持っているとは仮定することは妥当であると考えられる。[+Q] の C が [+ph] であるか [-ph] であるかによって、(8)a.b. の容認の差が出るのである。

また、上山(1990)は「だ」「です」は時制を持たないと述べているが、(9)のような対比を考えれば、(9)a. が [-past] であることは明らかである。

- (9) a. 今住んでいるマンションは、家賃が 6 万円だ。

b. 以前住んでいたマンションは、家賃が 8 万円だった。

さらに、「だ」、「です」に時制がないとすると、主語にどのように主格を与えるのかという問題も起こってくる。⁸ 従って、「だ」の時制は [T-past/-ph] であると仮定することも妥当であると考えられる。今のところ、[T-past/-ph] は連結詞「だ」の [-past] のみに現れると考えられる。⁹

2. 連結詞「だ」

ここで、連結詞「だ」について、もう少し詳しく見ておきたい。形容詞と連結詞について、青柳 (2006) は、Nishiyama(1998) に準じて (10)(11) のように分析している。青柳 (2006) は、形態的併合 (後述 III -1. (16) 参照) の際にこのような補充・縮約が起きると主張している。

(10) ku + ar + (r)u → i

(11) de + ar + (r)u → da

本論文でここまで見てきたように、[-past] の連結詞を含む文は他の文と異なる様相を見せるので、これを説明するために (11) を次のように書き換えたい。¹⁰

(12) a. de + ar + (r)u → dearu (「だ」縮約は起こらない)

b. de + ar + ϕ → da

すなわち、[-past] の連結詞文では、T が /(r)u/ である場合には、縮約が起こらず、T が ϕ である場合のみ縮約が起こるとする。形容詞は [-past/+ph/(ru)] と併合して、(10) のように /i/ という形で補充される。連結詞は、[-past/-ph] と併合した場合に、(12)b. のように /da/ という形に縮約される。この違いによって、

形容詞文と名詞文の振る舞いの違いを説明する際の方向性が見えてくる。上山 (1990) と Yoshida and Yoshida (1996) が分析した「か」のない疑問文において、形容詞文と名詞文では、容認の可能性が異なる。

- (13) a. 家賃が高い？
 b. *家賃が6万円だ？

これは形容詞文と名詞文の T [-past] の [±ph] の違いによるものであると説明できる。さらに、それぞれの構文に「です」が現れた場合、「です」と T との結合の仕方が違ってくる。この点については、注9でも述べたように、さらに検証する必要があるので、別の機会に譲りたい。

III 理論的背景

1. 形態的併合

本論文では、「だ」と「だった」の非対称性を説明するために、青柳 (2006) の拘束形態素 ([+bound]) の分割・併合の規則を利用するので、ここでこの規則について簡単に述べておきたい。

青柳 (2006) は Fukui and Takano (1998) の分割と線形化の理論を取り入れている。Fukui and Takano (1998) の線状化の規則は次のようである。

(14) 線形化 (Linearization)

分割 (Demerge) は句構造 Γ に適用すると、 Γ の構成素である最大投射 α ($=X^{\max}$) と Γ の残りの部分 ($\{\Gamma - \alpha\}$) のペア $\{\alpha, \{\Gamma - \alpha\}\}$ を生み、連鎖化 (Concatenate) はこれを $\alpha, (\Gamma - \alpha)$ の順に並べる。(青柳 (2006) より)

分割は併合と全く逆の操作で、PFで行われる。句構造の上から下へ向かって順に適用される。分割された要素を線條にならべる操作が連鎖化である。(14)は分割された要素のうち、最大投射を左側に並べよと示唆している。

この線形化に加えて、青柳(2006)は、拘束形態素([+bound])の併合の規則を次のように述べている。

(15) 分割(Demerge)によって切り離された主要部 α が拘束形態素([+bound])であるならば、 α はただちに別の主要部と形態的に併合しなければならない。

(16) 形態的併合(morphological merger)とは付加(adjunction)であり、隣接条件(adjacency condition)にしたがう。(Marantz 1988, 1989, Halle and Marantz 1993 参照)

日本語は膠着言語なので、ほとんどの機能範疇は [+bound] である。(16)は日本語のCやTに適用される。青柳(2006)によると、別の主要部に形態的に併合する際に、選択制限が働くので、決まった語順が導き出される。選択制限は青柳(2006)によると、次のようになっている。

(17) a. C^0 : [T⁰ __] b. T^0 : [v⁰ __] c. v^0 : [V⁰ __] d. D^0 : [N⁰ __]

この形態的併合によって、日本語の機能範疇が統語部門で移動しても、移動しなかった場合と同じ語順になることになる。日本語において、動詞と接辞(機能範疇)の結合は、動詞の上昇であるとする分析もあるが、青柳(2006)を始め、Sakai(1998)、酒井(2000)で動詞の形態的併合の分析の優位性が示されているのでそれらを参照してほしい。本論文では、(15)(16)(17)の青柳(2006)の分析を取り入れて、議論をすすめたい。

2. 機能範疇の可視誘導条件

空の範疇を想定する以上はそれらが何らかの役割を果たしていると考えるのは当然である。特に、X' 理論から裸句構造理論に移行した今、不必要な空の範疇を想定する理由はない。Fukui and Sakai(2003) は、空の機能範疇の役割を明確にするために、次のような機能範疇の可視誘導条件を示している。

(18) The visibility Guidance for Functional Categories

機能範疇は主要な言語データに於いて、以下のどの方法かで可視でなければならない。

- (i) 音形を持ち、発音されるように指示されている。
- (ii) 近くにある語彙範疇の音形に影響を及ぼす。
- (iii) 最大投射が近くの位置に移動する際の引き金になる。

機能範疇が [-ph] である場合は、(18)(ii) か (iii) を満たさなければならないということである。この条件の有効性については、詳しい検証が Fukui and Sakai(2003) でなされているので、そちらを参照してほしい。第IV節 1.2 で (18)(iii) の特定の場合として、T[-ph]、C[-ph] の可視条件を提示する。

3. 統語部門での位置と PF での語順

日本語は、主要部が右側にあるので、v が T に移動したり、T が C に移動したりしても、語順は変わらないが、主要部が上位にある最大投射の Spec の位置に移動すると語順が変わる。Fukui and Takano(1998) は主要部が右側にあるものを基本語順とし、素性照合のための移動を「Spec への代入」であるとしている。¹¹ この分析を取り入れて、空の機能範疇の下にある主要部が素性照合のために、空の機能範疇の Spec に移動すると、統語部門での位置関係が変わる。しかし、第III節の 1. で示した青柳 (2006) の拘束形態素 ([+bound])

の併合の規則(15)を使えば、これらの移動はPFの語順に影響を与えない。従って、正確に言えば、日本語の空の範疇は(18)(iii)を満たしているがPFでは変化がないので、可視ではないことになってしまうかもしれない。

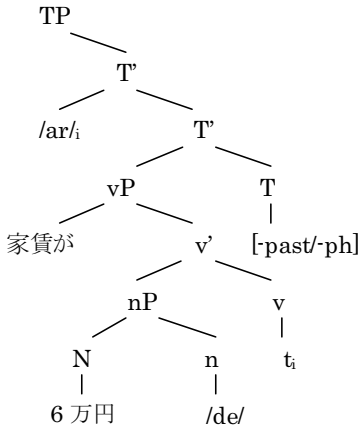
移動の有無と可視誘導条件を満たすべきレベルとの関係の明確化は今後の課題として、日本語においても、機能範疇が空である場合はその機能範疇を可視にするために移動が起こるとする。

IV 空範疇を含む文の構造と派生

1. 空の T[-past] を含む文

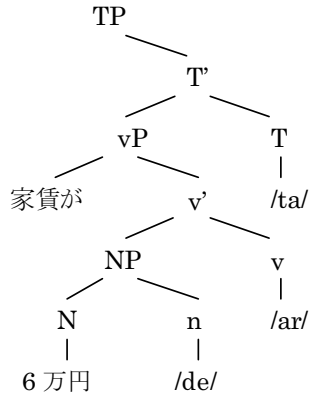
まず、時制が [-ph] である場合を見てみよう。Fukui and Sakai(2003)の理論に従えば、(19)a. に示したように [T -past/-ph] を可視にするために、連結詞の補助動詞 (v)/ar/ が Spec,T に移動する。これは (20) の T[-ph] の可視条件の要請によるものである。(20) は、T[-ph] が (18)(iii) を満たすための条件である。一方、(19)b. のように [+ph] の場合は統語部門でも移動はない。しかし、第III節の3. で述べたように、(19)a. の移動はPFでの語順に何の変化も与えない。従って、PFに現れる表示の語順は、[-past] と [+past] で差はでない。樹形図の下に示した表示は、各要素が分割された後、連鎖化した様子を表している。この中で、「+」は機能範疇が別の主要部にただちに形態的併合した場合を表し、「-」は一般的な形態的併合を表す。

(19) a 家賃が 6 万円だ。



家賃+が-6 万円+/de/+ar/+φ
 →家賃+が-6 万円+/da/

b. 家賃が 6 万円だった。



家賃+が-6 万円+/de/+ar/+ta/

(20) T[-ph] の可視条件

近くの [+ph] の最大投射が Spec,T に移動して T[-ph] を可視にしなければならぬ。

2. C[+Q] と C[-ph]

補文標識が空である場合を検討する前に、第 II 節で示した上山 (1990) の CP が [+Q] と解釈される条件 (7) を [+Q] と解釈の条件と (20) に倣って C[-ph] の可視誘導条件に分けて書き直しておきたい。上山 (1990) のように「だ」「です」は時制を持たないとするのではなく、「だ」は T[-past/-ph] を持つと考える。また、上山 (1990) と Yoshida and Yoshida(1996) の考察から、T[+ph] のみが [+Q/-wh] を照合できるとする。

(21) ある CP が [+Q] と解釈されるためには、次のどちらかでなければならない。

a.C[+Q / +wh] の場合： wh 語の [+wh] と照合する。

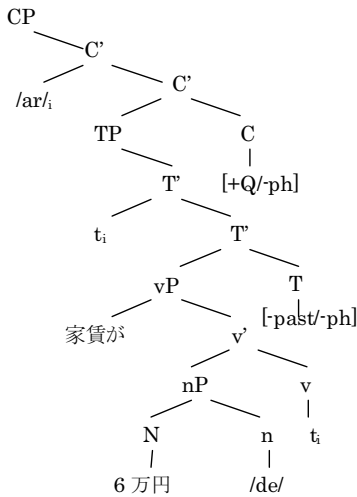
b.C[+Q / -wh] の場合： T[+ph] の [-wh] と照合する。

(22) C[-ph] の可視条件

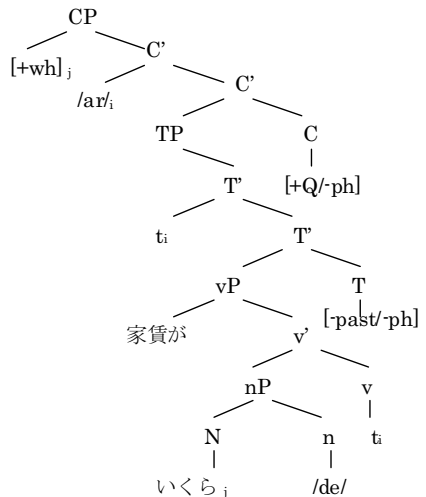
近くの [+ph] の最大投射が Spec,C に移動して C[-ph] を可視にしなければならない。

次の (23)a. と b.c. の対比は、(21) の [+Q] の解釈の可否によるものである。(23)a. は [-wh] の照合ができず [+Q] と解釈できない。(23)b. は (21)a. によって、(23)c. は (21)b. によって、[+Q] と解釈できる。(22)C[-ph] の可視条件については、(23)a.b. は v[+ph] の連続的な移動によって、(23)c. は T[+ph] の移動によって、満たされる。¹²

(23) a.(=3)a.) *家賃が 6 万円 だ？ b. (=3)b.) 家賃が いくら だ？

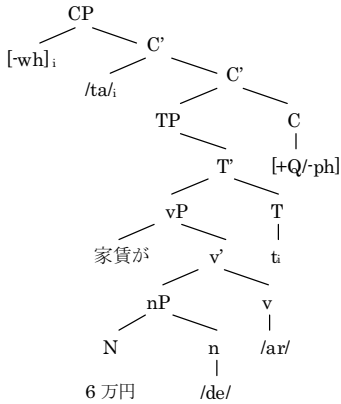


*家賃+が-6 万円+/de/+/ar/+φ+φ



家賃+が-いくら+/de/+/ar/+φ+φ

c. 家賃が 6 万円だった？



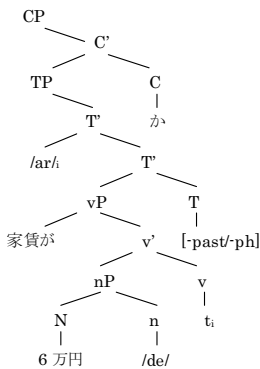
家賃+が+6 万円+/de/+/ar/+/ta/+ φ

3. 機能範疇の形態的併合の条件

次に、疑問の補文標識 /ka/ がついた場合を見てみる。

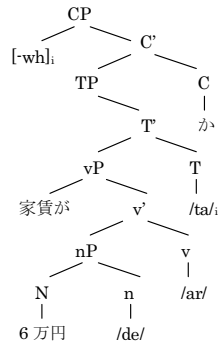
(24)=(1)

a. *家賃が 6 万円だか？



*家賃+が+6 万円+/de/+/ar/+ φ+か

b. 家賃が 6 万円だったか？

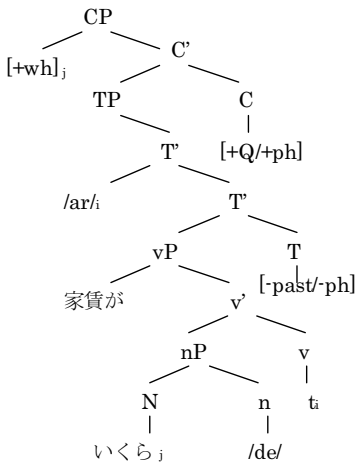


家賃+が+6 万円+/de/+/ar/+/ta/+か

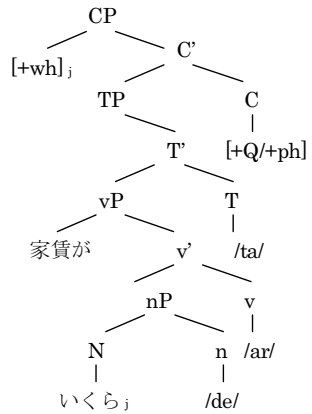
ここで (24)a. が非文となるのは、(23)a. と同様に、(21) による [-wh] の照合ができないからである。

しかし、次の (25)a. は「いくら」という wh 語があり、[+Q] として解釈できるが、非文である。

(25)=(2)a. *家賃が いくらだか? b. 家賃が いくらだったか?



*家賃+がいくら+de/+ar/+φ+か



家賃+がいくら+de/+ar/+ta/+か

(25) は疑問詞「いくら」があるので、(21)a が満たされるはずである。それでも、(25)a. のように、T が [-ph] の場合は非文になる。

問題となるのは、[+Q] の解釈ではなく、PFでの形態的併合であろう。(15)(16)(17)に従って形態的併合をする。C' が分割され、[_C+Q/+ph/ka/] が切り離される。[_C+Q/+ph/ka/] は [+bound] であるためにただちに別の主要部 [_T-past/-ph] と形態的併合する。この際、[-ph] の T が形態的併合の着地点 (ホスト) となることに問題があると思われる。(24)b.(25)b. の場合は着地点が [+ph] であるので、問題がないと考えられる。そこで、仮に、機能範疇の形態

的併合に次のような条件を設ける。

(26) 機能範疇の形態的併合の条件 (仮)

[+bound] の主要部 X^0 の形態的併合において、[-ph] の主要部 Y^0 はホストになれない。

この条件は、日本語に存在すると考えられている [-ph] の代名詞 pro に助詞 ([+bound] の接辞) がつかないことから支持される。

ところが、(23)b. に示したように、C[-ph] が T[-ph] に形態的付加することは可能である。(23)b. が非文でないことから、形態的併合をする主要部が [-ph] である場合は、そのホストが [-ph] でも構わないということである。従って、(26) の条件を (27) のように書き直す必要がある。

(27) 機能範疇の形態的併合の条件 ((26) を修正)

[+bound][+ph] の主要部 X^0 は [-ph] の主要部 Y^0 に形態的併合ができない。

ここで、また、[-ph] の代名詞 pro に助詞 ([+bound] の接辞) がついた場合を考えてみよう。pro に [+ph] の助詞は形態的併合ができないが、[-ph] の助詞がついていると考えれば、(27) の条件は正しい予測ができる。

ここまでをまとめると、(23)a.(24)a. が非文になる理由は、(21) の C[+Q] の条件違反によるものであり、(25)a が非文となるのは、(27) の機能範疇の形態的併合の条件違反である。

4. 主文と埋め込み文

最後に、(4) に挙げた非対称性について考えたい。

- (28)=(4) a. *家賃が いくらだか。(=(25)a.)
 b. 花子が [家賃が いくらだか] 知っている。¹³

(28)a. は、(27) の機能範疇の形態的併合の条件によって非文である。この条件は (28)b. も非文とするはずである。しかし、実際は (28)b. は容認可能である。(28)a.b. の「家賃がいくらだか」の違いは、a. 単文であるか、b. 埋め込まれた文であるかである。

ここで、気づくのは、埋め込み文の場合は、C の「か」が空になることはないということである。

- (29) a. *花子が [家賃が いくらだ ϕ] 知っている。
 b. *花子が [家賃が いくらだった ϕ] 知っている。
 c. *花子が [太郎が どこに 行く ϕ] 知っている。
 d. *花子が [太郎が どこに 行った ϕ] 知っている。

主文の動詞(この場合「知っている」)が「か」を要求しているのである。そのように考えると、埋め込み文が主文の動詞と結合する時に、/ka/ という音形が挿入されたと考えられないであろうか。次の例を思い出してほしい。

- (30)=(23)b.) 家賃が いくらだ [c+Q/-ph]?

(28)b. の埋め込み文は、(28)a. ではなく、(30) であると考えられないだろうか。埋め込み文が主文の動詞によって選択される時、埋め込み文の [-ph] の C に /ka/ という音形が与えられるのである。ある査読者氏のご指摘に従って、このことを一致 (Agree) のひとつと捉える。この一致素性 (仮に [+F] とする) を持っている補文標識は、次のような語彙挿入を受けると考えられる。

(31) $\{[c+Q/-ph, +F]\} \Leftrightarrow /ka/$

この語彙挿入により、次のように文が生成される。

(32) 花子が [家賃が いくらだ $[c+Q/-ph]$] 知っている。

→ 花子が [家賃が いくらだ $/ka/$] 知っている。

これは、音の挿入を PF で行うという Halle and Marantz(1993) の Distributed morphology の理論の中では可能な説明である。

V 残された問題と今後の展望

1. 空の連結詞

ところで、本論文で扱った (1)a のような文 ((33)a. に再録) は非文であるのに、「だ」がない (33)b.c. は容認可能である。

(33) a. *家賃が 6 万円だか ?(=(1)a., (24)a.)

b. 家賃が 6 万円か ?

c. 家賃が 6 万円 ?

(33)b.c. は、「だ」が現れていないので、n と v と T は①すべて形式素性 $[-ph]$ を持っているか、あるいは、②顕在的統語部門では $[+ph]$ であったが音韻部門で音形が削除されたと考えることができる。

もし①であるとするれば、T が $[-ph]$ となる。(21) により、 $[+Q]$ の解釈ができないので、非文となるはずである。しかし、実際は容認可能である。従って、②であると考えざるを得ない。②であるとするれば、音韻部門に次のような随意規則があると考えられる。

(34) $[_n+\text{ph}/(\text{de}/)]+[_v+\text{ph}/(\text{ar}/)]+[_T+\text{ph}/(\text{ru}/)] \rightarrow \phi$

(33)b.c. の形態的併合後の構造と音韻規則適用後の構造はそれぞれ以下のようであると考えられる。

(35) a. 家賃 + が 6 万円 $[_n+\text{ph}] + [_v+\text{ph}] + [_T-\text{past}/+\text{ph}] + [_c+\text{Q}/+\text{ph}]$

→ 家賃 + が - 6 万円 $+/\text{de}/+/\text{ar}/+/\text{ru}/+$ か

→ 家賃が 6 万円 ϕ か

b. 家賃 + が - 6 万円 $[_n+\text{ph}] + [_v+\text{ph}] + [_T-\text{past}/+\text{ph}] + [_c+\text{Q}/-\text{ph}]$

→ 家賃 + が - 6 万円 $+/\text{de}/+/\text{ar}/+/\text{ru}/+$ ϕ

→ 家賃が 6 万円 $\phi \phi$

(35)a.b. とともに、T は $[\text{+ph}]$ であるので、(21)b. により $[\text{+Q}]$ と解釈することができる。また、(35)a. において、 $[\text{+ph}]$ の C が形態的併合の際 $[\text{+ph}]$ の T に付加しても (27) 機能範疇の形態的併合の条件に反しない。形態的併合後に音韻規則がかかるので、 ϕ に「か」が続いても問題はない。

しかし、今のところ (34) の規則についてこれ以上述べることができないので、この問題は今後の課題としたい。

2. 空の $[-\text{Q}]$ の補文標識

本論文では、日本語の空の機能範疇として、 $[_c+\text{Q}/-\text{ph}]$ と $[_T-\text{past}/-\text{ph}]$ が存在するとして、これらに関わる現象を考察した。日本語の時制は、 $[-\text{past}]$ の $[\text{+ph}/(\text{ru}/)]$ と $[-\text{ph}]$ 、 $[\text{+past}]$ の $[\text{+ph}/(\text{ta}/)]$ があることになる。¹⁴ また補文標識としては、 $[\text{+Q}]$ の $[\text{+ph}/(\text{ka}/)]$ と $[-\text{ph}]$ について言及したが、他に $[-\text{Q}]$ の $\text{C}[-\text{ph}]$ が考えられる。これは、次のような文に現れる補文標識の「と」である。

この「と」は、(27)の条件が正しいとすれば、[+ph]ではなく[-ph]であるはずである。これは埋め込み文に現れる「か」と同じである。(IV-4. 参照)

- (36) a. 花子が 家賃が 6万円だ [C-Q/-ph] 知っている。
 →花子が 家賃が 6万円だ /to/ 知っている。
 b. 花子が 太郎が 明日 来る [C-Q/-ph] 言った。
 →花子が 太郎が 明日 来る /to/ 言った。

一方、「と」の [+ph(/to/)] はない。主文に「と」が現れることがないからである。「と」は埋め込み文のみに現れる。埋め込み文に [-ph] として表れ、主文の動詞に選択される時、一致により、音形 (/to/) が与えられるのである。

3. その他の連結詞の [\pm past] の非対称性

日本語の連結詞を含む関係節にも [-past] と [+past] の非対称性が見られる。英語の関係節は CP であるとされているが、日本語の関係節は IP であるという分析もある。(注1 参照) しかし、日本語の関係節は (39) のように CP であるとすれば、(37) の非対称性を、(23)a.c.((38) に再録) の非対称性と同様の説明ができる。

- (37) a. *[6万円だ] 家賃・・・
 b. [6万円だった] 家賃・・・
- (38)=(23)a.c.) a. *家賃が 6万円 /de//ar/[_T-past/-ph] [_C+Q/-ph] ?
 b. 家賃が 6万円 /de//ar/ [_T+past/+ph(/ta/)] [_C+Q/-ph] ?
- (39) a.*[Op_i [e_i 6万円 /de//ar/[_T-past/-ph] [_C+rel/-ph]]] 家賃・・・
 b.[Op_i [e_i 6万円 /de//ar/[_T+past/+ph(/ta/)] [_C+rel/-ph]]] 家賃・・・

(38)a. が非文になるのは、Tが空であるために [+Q] と解釈ができないからである。(38)b. はTが [+ph] であるために条件を満たす。(39) もこれと同様に、[+rel] の照合の可能性によって、説明できるのではないかと思われる。

さらに、同じように「だ」の [-past] と [+past] で容認の差が出る構文がいくつかある。

- (40) a. *[家賃が 6万円だ]みたいだ。¹⁵
 b. [家賃が 6万円だった]みたいだ。
- (41) a. *[家賃が 6万円だ]はずだ。
 b. [家賃が 6万円だった]はずだ。
- (42) a. *[家賃が 6万円だ]ことに驚いた。
 b. [家賃が 6万円だった]ことに驚いた。

これらの構文に空のCが存在し、それを可視するために T[+ph] の移動が必要であるとすれば、a. と b. の非対称性が (38) と同じように説明できる。

VI おわりに

日本語の空の機能範疇、特に [C+Q/-ph] と、[T+past/-ph] について、Fukui and Sakai(2003) によって提案された “The visibility Guidance for Functional Categories” に従って分析した。T[-ph] は連結詞の [-past] に現れるので、名詞文の [±past] の非対称性を説明することによって、日本語に [T-past/-ph] を認める必要性を明らかにした。また、[C+Q/-ph] と [C+Q/+ph(/ka/)] の非対称性を考察することによって、日本語に [C+Q/-ph] を認める必要性を明らかにした。

さらに、①形態的併合において、[+ph] 要素は [-ph] 要素に付加できないこと ②埋め込み文の補文標識/ka/ は [-ph] であること ③ C[+Q/-wh] は T[-ph] では照合できないこと (上山 (1990) と Yoshida and Yoshida (1996) より)

がわかった。

残された問題はいくつかあるが、今後、他の空の機能範疇を考察することによって、新たな展開が見られることを期待している。

* この研究の構想の段階から、適切な助言をしてくださった南山大学の阿部泰明先生に、心より感謝の意を表したい。また、査読をお引き受けくださり、貴重なコメントをくださった2名の匿名査読者氏にもお礼を申し上げたい。論文中に明示した箇所以外にもコメントに従って、数箇所、加筆・修正をした。それでも、本稿に誤謬がある場合は、当然ながら筆者の責任によるものである。

注)

¹ 日本語の関係節に空の補文標識が存在することは早くから指摘されている。しかし、日本語の関係節はCPではなくIPであるという分析(Murasugi(1991))もある。日本語の関係節については、第V節で触れる。

² ここでは、名詞文だけを扱うが、次のi) a.b.のように形容動詞文も同様に分析できる。一方、ii)a.b.のように動詞文では[±past]の差は出ない。

- i) a. *この街が 静かだか？
b. この街が 静かだったか？
- ii) a. 太郎が 大学に 行くか？
b. 太郎が 大学に 行ったか？

³ ある査読者氏に、形式素性[±ph]を設定するということは、①この素性が言語横断的に支持されるか、また、②日本語でも連結詞文以外にも支持する事実があるかを明らかにしなければ、ad hocな仮説になるとのご指摘をいただいた。①については、Fukui and Takano(1998)で「機能範疇の主要部はそれが音形を持たない場合に素性照合が行われる」と述べられている。すなわち、「機能範疇が音形を持たない([-ph])」ことが、素性照合のための移動や併合の引き金となるという提案がなされている。ここでも、形

式素性 [±ph] を仮定していると考えられる。さらに、Fukui and Sakai (2003) では、上記の考え方を押し進めて、“The visibility Guidance for Functional Categories”(本文(18)を参照)を提案している。また、②については、本論文で取り上げた C の [±ph]、T の [±ph] 以外にも、機能範疇ではないが、日本語の空の代名詞 (pro) と音形のある代名詞の差にも、形式素性 [±ph] が関与している可能性がある。すなわち、中村 (1996) で示されたように、日本語の pro が代名詞の音形のないものだとすると、次の i) のような例の容認の差は単なる語彙挿入時の音形の有無の差だけでは説明できない。[±ph] のような素性が関わっている可能性がある。ただし、代名詞は機能範疇ではないので、本論文で扱った条件とは異なる制約が必要である。詳細については、何もわかっていないので、今後の課題としたい。

i) a. ビル_iの悪評が 彼_iを 傷つけた。

b. *ビル_iの悪評が pro_i 傷つけた。

⁴ [C+Q/-ph] は、ある語が範疇 C に属し、[+Q] と [-ph] の素性を持っているという意味である。もちろん、他の素性も持っているが必要なもの以外は省略する。

⁵ 上山 (1990) と Yoshida and Yoshida (1996) は、「です」を含む「か」のない疑問文についても「だ」の場合と同様の分析をしているが、「です」については更なる考察が必要だと考える。「です」についての分析は別の機会にする。(注9参照)

⁶ この例の容認度が*ではなく、?*となっているのは、方言や個人差によって容認可能となる場合があるからである。

⁷ Yoshida and Yoshida (1996) は Rizzi(1996) の Wh-criterion と Chomsky(1986) の Dynamic Agreement を使ってさらに精密な条件を出している。しかし、ここでの議論では、上山 (1990) の条件で充分なので、(7)を示した。

⁸ 青柳 (2006) は、日本語の主格は、T によって与えられるのではないという主張をしている。

⁹ 「です」については、別の分析が必要である。形容詞文につく「です」は時制を持たないからである。ここでは、「です」をこれ以上扱わず、別の機会に譲りたい。

¹⁰ 「だ」の縮約に関して、ある査読者氏に貴重なコメントをいただいた。そのコメント

を考慮して本文のように修正した。

¹¹ Fukui and Takano(1998)によると、この「Spec への代入」は従来の代入とは異なる。多重 Spec を想定しており、その Spec への移動である。

¹² ある査読者氏から v[+ph] の連続的な移動の可能性についてご指摘いただいた。これにより、(20)(22) の条件を [+ph] の移動に限定することができ、(18) により適合する形に修正できた。

¹³ 埋め込み疑問文が「か」を伴うのは疑問詞疑問文に限られる。真偽疑問文の場合は、「か」ではなく、「かどうか」が現れる。

i) 花子が 家賃が 6 万円だ ?* か/かどうか 知っている。

ii) のように「か」が許される場合があるが、これは、iii) のように「かと」が「か」に変わったものであると考えられる。(詳しくは西垣内・石居 (2003)pp.171-172. 参照)

ii) 花子が 家賃が 6 万円だったか 聞いた。

iii) 花子が 家賃が 6 万円だったかと 聞いた。

¹⁴ Nishiyama(1998) は、形容詞の [-past] 時制として /i/ を提案している。

¹⁵ この文が非文になることは、Nishiyama(1998) でも指摘されている。

[参考文献]

青柳宏 (2006) 『日本語の助詞と機能範疇』 ひつじ書房。

上山あゆみ (1990) 「か」のない yes-no 疑問文の構造と I-to-C 移動の普遍性について」, *The Kansai Linguistic Society* 10, pp. 23-32.

酒井弘 (2000) 「古典的類型論と比較統語論：日本語動詞形態の分析を通して」
『京都大学言語学研究』第 19 号, pp. 117-146.

中村捷 (1996) 『束縛関係一代用表現と移動一』 ひつじ書房

西垣内泰介・石居康男 (2003) 『英語から日本語を見る』 研究社

-
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*, Cambridge, MA: MIT Press.
- (1993) “A Minimalist Program for Linguistic Theory,” in *The View from Building 20*, ed. by K. Hale and S. J. Keyser, pp.1-52, Cambridge, MA: MIT Press.
- Fukui, N. (1995) “The Principle and Parameters Approach: a Comparative Syntax of English and Japanese,” in *Approaches to Language Typology*, ed. by Shibatani and T. Bynon, pp.327-372, Oxford: Clarendon Press.
- Fukui, N. and Y. Takano (1998) “Symmetry in Syntax: Merge and Demerge,” *Journal of East Asian Linguistics* 7, pp27-86.
- Fukui, N. and H. Sakai (2003) “The Visibility Guideline for Functional Categories: Verb Raising in Japanese Related Issues,” *Lingua* 113, pp.321-375.
- Halle, M and A. Marantz, (1993) “Distributed Morphology and the Pieces of Inflection,” in *The View from Building 20*, ed. by K. Hale and S.J. Keyser, pp.111-176, Cambridge, MA: MIT Press.
- Marantz, A. (1988) “Clitics, Morphology Merger, and the Mapping to Phonological Structure,” in *Theoretical Morphology*, ed. by M. Hammond and M. Noonan, pp.253-270, New York: Academic Press.
- (1989) “Clitics and Phrase Structure,” in *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, ed. by M. Baltin and A. Kroch, pp. 99-116, Chicago: University of Chicago Press.
- Miyagawa, S. (1987) “Categories in Japanese,” *Lingua* 73, pp29-51.
- Murasugi, K. (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability, and Acquisition*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.

- Narahara, T. (2002) *The Japanese Copula? Forms and Functions*, New York: Palgrave Macmillan.
- Nishiyama, K. (1999) "Adjective and Copulas in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 8, pp. 183-222.
- Sakai, H. (1998) "Feature Checking and Morphological Merger," *Japanese/Korean Linguistics* 8, pp. 189-201.
- Suzuki, T. (1999) "Da, Desu, Desho: An Expletive Verb Analysis of Japanese Copula constructions," 『アカデミア』(文学・語学編) 第67号 pp. 325-365, 南山大学.
- Rizzi, L. (1996) "Residual Verb Second and the Wh-Criterion," in *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, ed. by Adriana Belletti and L. Rizzi, pp. 63-90, Oxford: Oxford University Press.
- Yoshida, K. and T. Yoshida(1996) "Question Marker Drop in Japanese," *ICU Language Research Bulletin* 11, pp.37-54.